

第 121 話〈台風直撃〉の要約と参考資料

第 121 話〈台風直撃〉の要約

1954 年 9 月宮崎県北部を猛烈な台風が襲いました。高千穂在住の新聞記者は、通信線が途絶え、道路が寸断された中を徒歩で延岡を目指し、命がけのルポを通して台風惨禍を伝えました。土呂久鉦山も台風被害に直面、その復旧後に新焙焼炉建設は軌道に乗りました。

第 121 話〈台風直撃〉の参考資料

1 2 1 - 1 小宮新八鉦山手帳より

1954 (昭和 29) 年

9 月 7 日 (火) 夕刻、13 号台風来襲す。道路 3 ヶ所、送電柱 5, 6 本倒壊す。

9 月 12 日 (日) 第 12 号台風来襲す。風雨強し。

9 月 13 日 (月) 13 号 (註・12 号の誤り) 台風風雨最も強く、特に雨量多し。午後 10 時頃より風雨幾分弱まる。道路等被害甚大なり。

9 月 14 日 (火) 14 日午前 2 時頃、M 氏事務所前より投身す。夜明けを待って探したが見つからぬ。

9 月 15 日 (水) 午後 7 時頃事務所前に於て M 氏を発見す。夕刻電灯つく。

9 月 16 日 (木) M 氏の葬式行はる。坑内排水着手す。

9 月 17 日 (金) 岩戸道路及坑内復旧協議す。坑内浸水 3 番坑入口天場 1 尺下迄。午後より第 2 ポンプ設置準備す。

*新聞によると、台風 5 号は昭和 29 年 8 月 18 日、台風 13 号は 9 月 7 日、台風 12 号は 9 月 13 日に来襲した。

1 2 1 - 2 投身自殺した M 氏のこと

土呂久鉦山労働者名簿より

明治 27 年 11 月 1 日生 入社：昭和 19 年 3 月 29 日 退社：昭和 29 年 9 月 15 日

土持栄士医師の話 (聴取日不明)

職頭の肩書。美しいひげをたくわえた、差出ぶり (面構え) のいよい男。村で一席設けたとき所長代理で出席していた。結核を苦しめてか、自殺。

佐藤医院 (?) で聞いた話 (1971 年 11 月聴取)

喜右衛門屋敷に住んでいたが、斑点があって、病気を苦に自殺。台風で大水がでたとき。

木山今朝市さんの話（1979年11月7日聴取）

Mは土方なんかしよった。大正10年頃、私が工事事務所に出ていたころ、井手の工事に来たことがあります。長崎かどっかの人で、嫁さんが小芹（土呂久畑中組の南）の女。

佐藤花恵さんの話（1979年4月14日聴取）

台風の晩、小又橋の上まで水がきた。惣見を上がる道をどんどん水が流れてくる。くぼみでブクンブクン水が湧いてよ。山がいつ崩れるかわからんやら、家におってもおじかった。Mさんの死体を見に行ったらよ。消防団が来て、死体を見つけて、線香をたきよった。警察が来るまで、石にひっかかって、ゆかた着てブランブランしよるとよ。ぞうりは事務所の前の大きな岩の下にきちんとそろえてあった。飛んだところの下にひっかかったもんじゃ。夜飛び込んだのが、捜して、次の日の昼ごろ見つかった。病気で、生きとつてもダメだと自分でサジ投げて、身投げしたもんでしょう。胸が悪かった。今じゃったら、公害とか何とか言うところじゃが、あのころは、肺病くらいしか思わん。

121-3 岩本利佐男記者が書いた朝日新聞記事（昭和29年9月16日）

惨禍拡大の九州の尾根を踏破 / ガケをはい60キロ / 高千穂から延岡まで一昼夜半 / 道も部落も形なし

【延岡発】 台風明けの14日早朝、記者は空前の台風被害を受けた五ヶ瀬川流域を高千穂町から延岡＝60キロ＝に向けて出発した。高千穂峡の水位は前夜12メートルを越えており、お先真暗な徒歩の走破である。高千穂町から約3キロの日の影町椎尾北の国道トンネルを抜けたとたん路面が約1千メートルにわたってえぐりとられている。高さ約40メートルもの間、全然路面がなく、はるか下を濁流が洗っている。ガケをよじ上って山間をはうように進む。ズボンもシャツもドロにまみれ体にくくりつけた写真機が邪魔になる。ここから日の影町の中心に至る17キロの間で道路らしい形が残っているのは約1割もないくらいだ。日の影町影待に着いた。国道の両側に一筋の部落があったのに、山際のタバコや工藤里美さん宅をわずか1軒残すだけで他の6戸が流失している。家を流された被災者がわずかに持ち出した家具を整理、ボウ然としている。

明治10年生れの工藤シカさん（78）が“いままでこんな水害は見たことがない。13日午後2時ごろ急に水があふれて逃げ出すのがやっとだった”と語った。

夕暮れの日の影町中心部落に着く。ここだけで約30戸が一瞬の間に流されたという。

消防団姫野副団長は“今度の災害は水の猛威を忘れ、年々河原にまで建築した人たちの無謀が原因ではなかろうか”という。

日の影駅に入ると道床が流され、一カ所に集められた赤サビた線路がアメのように曲

って構内の一部は崩壊。構内外れから約 2 千メートルはレールが流失している。懐中電灯を唯一の頼りにはうようにして進む。夜明けとともに再び川を下る。九電八戸ダムは水門を全開して放水したため、ダム完成以来姿を現したことの無い川底の岩石が頭を出している。槇峰駅構内の崩壊もひどい。東臼杵郡に入るとさすがに道路被害は少なくなってきた半面、田畑が川砂で埋没している。昭和 24 年千三百万円で完成した速日渡橋が橋脚だけを残して流失、約 3 千メートル下流に残ガイを打上げられている。

13 日午後 4 時ごろ、上流から流れてきた家屋 10 数戸が橋に突当たったため流失したという。日の影線槇峰駅鉄橋もその家がひっかかって流されたのだろう。槇峰鉱業所 3 千名の食糧がきょう 1 日分だけしかないが、救援米の輸送方法がないとあわてていた。

北方村八峽部落の大きな平屋建 1 戸は流され国道の真中にデンと座ったままである。部落総出で後始末をしているが動きそうにもない。

川水流部来た。もうここまでくると延岡に出てしまったような感じだ。全部落いずれも水没。軒先に浸水の跡が残っている。粘土と川砂が道路も水田も埋めつくして乾いている。

電源地帯五ヶ瀬川の発電所はほとんど浸水で発電不能、九電関係では星山（日の影町）回淵（三ヶ所村）両発電所の再操業は不明。旭化成自慢の水ヶ崎でさえ発電機は 1 基しか回転していない。日の影発電所もダメ。これらの人を送ってきたオート三輪車に乗ったものの一面の砂利で道か畑かわからない。どこもここも家具やフトンを乾かしている。いまままで黄濁色一色になれてきた目には異様な美しさを感じさせた。

南方村小峰部落には押寄せた流木がごった返している。おそらく 60 戸が流失した日の影町の家屋材ではなかろうか。大被害を受けた延岡市の街並をみても、それにも増した被災地をみてきた記者には他国へきたような錯覚を起させ 15 日午後 6 時一昼夜半ぶりに本社延岡通信局へかけ込んだ。（岩本高千穂通信員）

1 2 1 - 4 笹山通記者が書いた日向日新聞記事（昭和 29 年 9 月 17 日）

壊滅した高千穂・日の影国道 / 大川と化した道路 / 台風 12 号の悲劇 / 再帰出来ぬと暗い顔の住民

台風 12 号は五ヶ瀬川沿いの延岡—熊本間横断 2 級国道を各所で根こそぎに洗い流し、特に西臼杵郡高千穂一日の影間 16 キロは約 7 割が完全流失した。電話線その他一切の連絡を絶たれた残ガイの町高千穂を記者は 15 日朝出発、断ガイは草の根、つる草を命の綱としてよじ登り、下りしながらひたすら歩きついで 18 時間、16 日午前 5 時延岡にたどり着いた。以下は濁流にのまれた国道の踏破記である。（笹山高千穂支局長）

台風 12 号は高千穂町で瞬間風速 41 メートル、五ヶ瀬川上流の高千穂峡神橋下の増水は危険水位 6 メートルの 2 倍以上、最高 12.5 メートルまでに達し神橋を越えたほどの出水だっただけに高千穂町から約 2 キロの地点旧鹿狩戸第一トンネルを越すと、直ぐ国道

は約 600 メートルにわたってがけふちから川底まで完全にもぎ取られ、道の面影さえ止めていない個所から約 500 メートル上方の旧県道に引返し、旭化成水ヶ崎発電所に出る。

(略) 真夜中の 1 時に北方村岡本に到着。ここは一番土地が低く未だに水はひいていない。ドロ水の中を歩いて同 4 時半南方村小峰に着く。ここは堤防が低いので濁流があふれ押し流された木材が、玄関口や屋根の上にひっかかっているのも異様だ。同 5 時同村松山までたどれば疲労のため一歩も歩けなくなり農協オート三輪車に乗せてもらって同 5 時 40 分ごろからやっと延岡市の灯が目に見えて来た。

笹山通氏の話 (1979 年 5 月 17 日聴取)

* 第 113 話と重複

昭和 29 年の 12 号台風の時、国道がズタズタになって音信杜絶の状態の中を一昼夜高千穂から延岡まで歩いて、そのあと車で宮崎に行ったのを最後に転勤になった。